

三十六年六月二十九日、全国に報道された、あの梅雨前線豪雨のため、村の前面にそり立っている大西山の地すべりのぎせいとなって、K・M 君はその短かい一生を終わってしまいました。

昭和二十二年十一月十六日生れ、満十三歳と七カ月の生涯をもって、K 君は行くえ不明となってしまったのです。

二日前の二十七日には元気で登校して、明るく、クラスの中のグループの長として、当番のやり方や、男女の協力などについて意見をまとめていました。雨がはげしくなると、近くの小渋川の水量もだんだん増して来て、クラスの生徒の落ちつきも少しずつ乏しくなり、しきりに窓の外をながめては、不安顔を見せるようになってきました。が、そんな時、K 君はただひとり、まじめくさった顔で、

「もう意見はありませんか。」

と、グループの意見をまとめることに苦慮していました。

その日は午前中で授業を終えて、遠くの者から集団で帰宅することになり、K 君は家が近いので午後まで居残っていたのですが、三時前には、全員自宅へ戻り、それから雨は増々はげしさを増し、ついに二十九日の午前九時二十分、一大音響とともに大西山の岩肌が生木をつけたままくずれおち、折からの大増水に激流となった小渋川の水を一きにせきとめ、土砂と濁流とが瞬時にして三十数戸の人家、四十有余の人命をうばい去り、K 君一家は不在中のおとうさんを残したのみで、激流に吞まれ、おかあさんは奇蹟的に助かったのですが、弟妹もろとも行くえ不明になってしまったのです。

K 君のクラスでは、もうひとり、やはり、元気で明るい S・O さんというお友だちが、これはおかあさんとともに亡くなっています。

こうした暗い悲嘆のどん底につきおとされ、全く途方にくれていましたが、幸いにして、全国各地からの暖かい同情の手が数多くさしのべられ、日が経つにつれて、再建のきざしも見えはじめてきました。

そして、K 君と S さんの思い出は、クラスの中で絶えなくなっていました。

クラスマッチの時の名捕手としてクラスのために活躍し、担任の先生のサインを忠実に守って、ぎせいバントでクラスの勝因をにぎるポイントゲッターとしての活躍、ホームルームの研究授業で、司会を引受けて、制限された時間の中で、問題を要領よくまとめ、参観の先生方から、賞讃を得たこと、等々、口数は多い方ではなかったが、大切な時にはいつも K 君の発言が大きく、クラスに影響していたことなどが時々話にのびります。

今は学校も十日間のみじかい夏休みに入っていますが、休み明けの二学期には、また、いつものように始業時間前に十分間のラジオ体操がはじまります。

K 君は、体育部の一員として、指令台にひとり立って、体操の師範もしていました。どちらかといえば、ひよろ長で、にがり切った、くそまじめな顔で、

全体の前に立って、軽快な動作で手脚の屈伸をする K 君の白いシャツとトレパン姿が、二学期からは、もう永久に見られないことは、学校全体にとつて何よりもさびしいことだろうと思います。

K 君のおかあさんは、墓参りに行くクラスの友だちに、アルバムなどを見せたりして、失われた子どもさんを偲んでいるのです。

おかあさんは、あの時一しよに濁流に流されて、奇蹟的にも九死に一生を得られたのですが、近くに人にひきあげられた時にも、

「子どもたちが……」

と叫んで、ひきあげるためにさしのべられた手をふりきって、再び濁流に戻ろうとされ、みんなでもりやりにひきとめたのだ……と、私は聞いています。

「焼野の雉子」のたとえを知らされる思いです。

一瞬にして平和な家庭を、この世の中で最も悲惨の極限にまで転換させられた御両親の気持は、私たちなど、計り知る由もありません。

K 君、

私たちのクラスみんなが、言い知れない気持ですごしていることを察してください。私たちは、なぐさめるなどということばさえ、うかばないのです。ただ、毎月二十九日に S さんと君の墓前に立ちつくして、君たちふたりをしのぶだけが、せめてものなぐさめになればと思っただけです。

(三十六年)